

令和3年度

研究総論

研究主題・副題

学びの自覚

— 「教科で願う学び」を育む授業—

1 はじめに

私たちは各教科の授業において、子どもたちが問いを追求し、様々な事象、描写や表現にこだわりながら題材の魅力を味わい、仲間と語り合うことを楽しむ姿を大切に日々の実践を重ねている。子どもたちが様々な視点からものごとを見つめ、分析し、思いや考えを伝え合うことができるような授業づくりのあり方を研究していくことは、未来を担う子どもたちを育むことにつながるだろう。

私たちは授業実践者として、教科の学びをつないでいく子どもたちのあらわれを見とりながら、「教科で願う学び」を育むことができるような授業づくりを研究していきたいと考えている。

2 教科で人間を育む

本校では「教科で人間を育む」という視点に立ち、授業における子どもたちのあらわれから、「どのような学びが育まれているのか」「教科の学びとはいかなるものか」ということを考えながら、授業研究を行ってきた。本校では「どのように教えるか」という、よりよい教え方を生み出す研究ではなく、学び手である子どもたちの立場に立って、教科や学びのあり方を求める研究を進めている。

では、「教科で人間を育む」とは具体的にどのようなことを示すのだろうか。実際の授業を例に考えてみる。

題材に出会った子どもたちは「なぜこのような現象が起こるのか」と疑問をもったり、追求する過程で「この表現は何か意図があるのではないか」と知的好奇心をくすぐられたり、「もっとわかりやすく自分の考えを伝えられるようになりたい」と向上心を抱いたり、様々な思いをもつ。そして、そのような思いによって、子どもたちは自然に仲間と語り合い、自分の考えを問い直しながら、より深い議論をしていくのである。そして、様々な語り合いの中で、異なる価値観に出会ったり、ものごとを見る様々な視点に気づいたりした子どもたちは、社会のあり方や自分の生き方を見つめていくだろう。

このように、子どもたちが教科の学びを通して人として成長していくことは、「教科で人間を育む」ことにつながるのではないだろうか。

そのために、私たちはその教科らしい思考や表現を積み重ねることによって、教科の本質を自分の中に取り込み、自らの生き方まで変化させることができるような本物の学びを生み出せる授業づくりをしていくことが必要だろう。

本物の学びとは、社会や文化から切り離されて存在するのではなく、現実の文脈の中にこそ存在すると私たちはとらえてきた。単に知識の量を増やした

り、切り取られた単一の技術を習得したりするだけでは、本物の学びを生み出すことはできない。そのため、現実社会の人々の営みを教室に持ち込み、子どもたちがその営みに参加して、教科の世界に没頭するような学びが不可欠である。そして、その中で子どもたちは教科本来のおもしろさや魅力を味わいながら、その教科を学んだ人らしいふるまいを身につけていくのである。

そのような授業づくりの根幹となっているのが「教科ならではの文化」を味わう授業である。教科ならではの文化とは、「教科らしいふるまいをしている人々の営み」とであると私たちは定義している。

教科ならではの文化を味わう授業において、子どもたちはその題材のおもしろさを存分に味わい、目を輝かせて追求したり、仲間と議論したりすることで、自己表現の方法を工夫したり、概念形成やものごとの見方を広げたりしながら、教科の学びに没頭していく。そのような姿は、必要な知識や技能を活用し、新たな考えや価値を自ら生み出していくようなダイナミックな学びを生み出していると言えるだろう。

このように私たちは、教科の内容を教えることに重きを置くのではなく、教科の学びを通してものごとを見る目を養い、社会のあり方や生き方を見つめ直すことを大切にするすることで、人として豊かに生きていく子どもたちを育てていきたいと考え、実践を重ねているのである。

3 前年度の実践から見いだされたこと

昨年度から「学びの自覚—教科で願う学びを子どものあらわれから考える—」という新テーマを設定し、授業研究を行ってきた。私たちが実践している教科ならではの文化を味わう授業において、子どもたちはどのような学びを育んでいるのか、ということに焦点をあてた研究である。

初年度となる昨年度は、各教科で願う学びとは何かということに注目し、授業における子どもたちのあらわれから、各教科で願う学びの姿を見とってきた。秋に行った理科の全体研究では、全職員で授業を参観し、願う子どもたちの学びの姿について分析を行った。その中で、以下の四点が成果として挙げられた。

- ① 電流と磁界の関係性という題材の本質にせまる学びが多くの子どもの間に育まれていたこと
- ② 予想、実験、結果、考察というサイクルからなる科学的な探求のプロセスは学びであり、子どもたちの題材の本質にせまる学びが見られた要因でもあること
- ③ 問いに基づく実験から考察することは、子ども

たちにとって学びを深めるために最も大きな要因であること

- ④ 題材づくりと題材構想, 問いの共有, 教科ならではの対話という授業づくりにおいて大切にしていることは, 子どもたちの学びを育むことにつながっていること

教科ならではの文化を味わう授業において, 子どもたちは「ゆらゆら人形」という身近なものに目を向け, なぜそのように動くのか, どのような原理があるのかということをも科学的まなざしで見つめ, その動きを説明するだけでなく, コイルと磁石という一般化した事象としてその動きの原理をとらえていくことができた。

「ゆらゆら人形はなぜ動くのだろう」という問いを共有した子どもたちは, 追求を通して「コイルの電流を入り切りすることで, コイルの周りに磁界を生み出したり, 消滅させたりしている。その結果, 磁石が動く」という科学的事実を見いだすことができた。さらに, その後の授業者からの「まっすぐな導線1本で磁石振り子は揺れるのだろうか」という問いかけをきっかけに, 子どもたちはまっすぐな1本の導線の周りの磁界の様子とコイルの周りの磁界の様子を関連づけながら「コイルは1本導線の磁界が束になったものだ」と結論づけていった。また, 「ゆらゆら人形」が動く仕組みを見いだしたり, 身近な電化製品を分解したりする場面では, 「身近にある動く電化製品はすべてコイルと磁石が入っている」と考える子どもの姿も見られた。

このようなあらわれと全体研究の分析をふまえて理科部では, 題材の本質にせまる学びを『ゆらゆら人形』に関する自らの疑問を課題化し, 課題の解決のための探求活動を主体的に行い, 磁界中で電流を流すと力が働く関係性を導き出すことや, その関係性から探求心を高めたり, 自然の事物・現象のとらえ方を発展・深化させたりすること」であるとまとめている。

他教科の実践においても授業者が想定した願う学びを含め, 子どもたちの様々な学びの姿を見とることができた。これらの姿から, 教科の本質にせまってしまう過程において, 子どもたちが実に多様な学びを繰り広げていることが見てきた。このことは 私たちが大事にしてきた教科ならではの文化を土台とした授業づくりの重要性を改めて裏付けるものとなった。

さらに, このような実践や分析から, 授業者が題材の価値や魅力を味わう授業の先にある育みたい人間像をふまえて授業構想をしていくことで, 子どもたちが教科の本質にせまってしまうことがわかってきた。

4 主題副題の設定理由

学びの自覚—「教科で願う学び」を育む授業—

(1) 「学びの自覚」をどのようにとらえるか

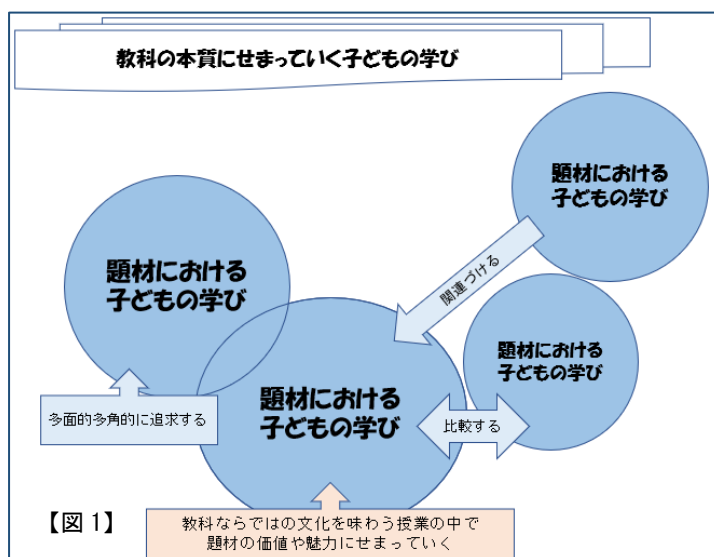
本校では教科の本質にせまってしまう子どもたちの姿を想定し, 「育みたい人間像」「教科ならではの文化」「教科で願う学び」の三つの柱を「教科の主張」として発信している。これは, その教科を学んだ人らしいふるまいを育むために重要となる「教科らしさとは何か」を研究していく土台にもなっている。

この「教科の主張」を基にして, これまでの授業における子どもたちのあらわれを見とっていくと, 「学び」と「自覚」を別々のものとしてとらえるのではなく, 「学びの自覚」という一つの姿としてとらえていくことの必要性が見えてきた。

例えば, 子どもの追求の過程では, 「前回の授業でこう考えていたけれど, 追求を通して今はこのように考えが変わった(考えの変容・深化)」「この発言をきっかけにこのように考えるようになった(変化のきっかけの自覚)」「この仕組みはわかったけれど, この事象はどのように考えたらよいのだろうか(さらなる追求)」といった記述や発言が見られる。このように, 子どもたちが教科の学びを通して新たなことに気づいて立ち止まったり, 既習事項と関連づけて本質にせまるひらめきをしたりすることも「学びの自覚」ととらえられるのではないだろうか。

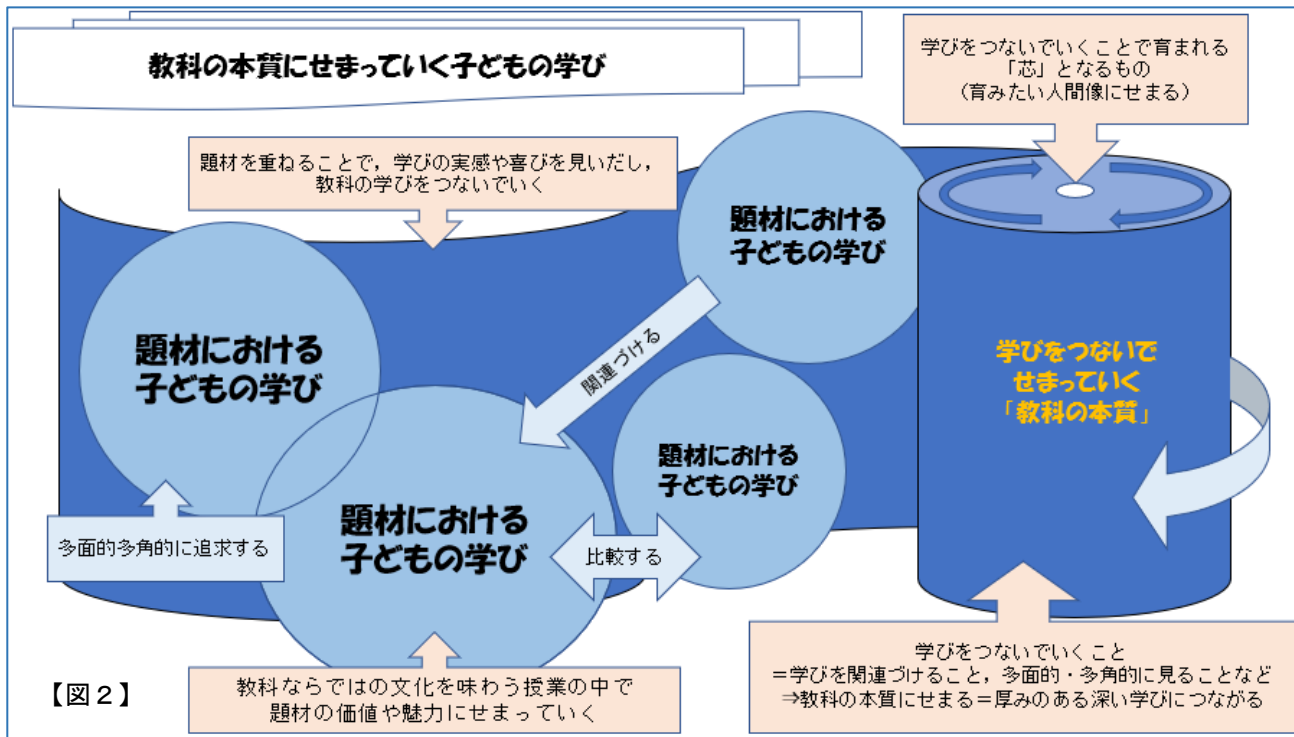
子どもたちは一つ一つの題材の中で学びを育んでいる。この学びは, 【図1】のように, 単一の題材としての学びだけでなく, 過去の題材における学びと関連づけたり, 比較したりして追求をすることで育まれているはずである。さらに, その過程で多様な視点からものごとを見る目を養い, 多面的・多角的に追求していくことで, 自らの価値観や考えをより深いものにしていくのではないだろうか。

そして, 題材を重ねながら学んでいく子どもたちは, 仲間との議論を通して考えが深まることや, 新



たな視点でものごとを見ることに学びの実感や喜びを見しているだろう。さらに子どもたちはその実感や喜びを原動力として、その教科だからこそ育むことができる教科の本質を少しずつ自分のものとしているはずである。【図2】

このように、子どもたちが自らの学びをつなげながら教科における「育みたい人間像」にせまっていくことは「学びの自覚」とは異なるのではないだろうか。



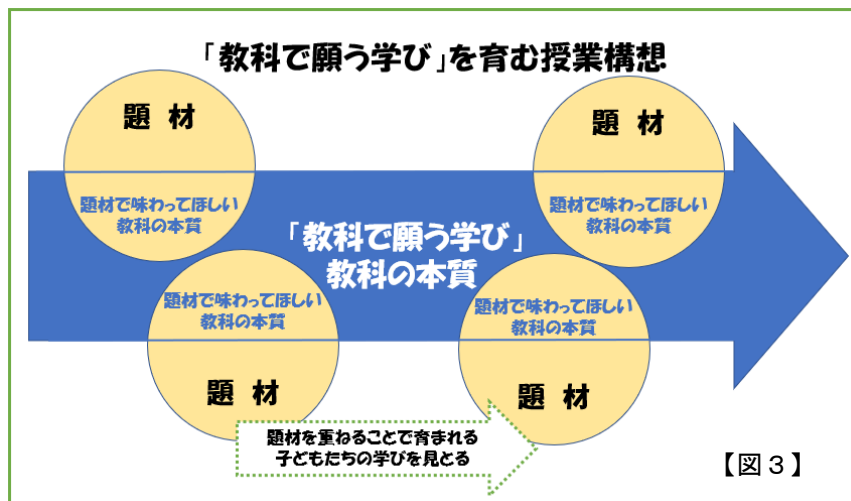
(2) 「教科で願う学び」を育む授業構想

私たちは子どもたちが教科の本質にせまっていくことを願って題材を選定している。教科の本質とは、その教科だからこそ育むことができる学びである。私たちはそのような学びを「教科で願う学び」ととらえている。そして、その「教科で願う学び」を、各題材で育てていきたい子どもたちの姿として具体化しながら授業を構想している。つまり、私たちが構想する授業は【図3】で示したように「教科で願う学び」を土台にしてつくられていると言えるだろう。

国語では叙述に根拠を置いて題材に描かれた主題にせまったり、自分と筆者の考えを比較して意見を述べたりすることで、言語感覚を磨き、描かれているものの価値や考え方、生き方などに対する自分なりの思いをより深いものにしたり、生き方そのものを見つめ直したりしていくことを学びととらえている。実際の授業を例にして考えてみると、すやまたけしの『素顔同盟』という題材で「ありのままの自分の姿を見せられる社会の価値」について考えた子どもたちが、次の題材で能登路雅子の『ディズニーランドという聖地』を読ん

だとき、『素顔同盟』に描かれた「聖域」としての「ありのままの自然」と『ディズニーランドという聖地』に描かれた「聖地」としての「作られた自然」を関連づけて考える姿が見られた。作品の主題を考えることを通して、小説と説明文という異なるジャンルの文章に描かれた「ありのままの自然」の意味を関連づけたり、「自分らしく生きることとはどのようなことか」を問い直したりしながら読み深めていく子どもたちの姿があった。

このような子どもたちの学びの姿は、単に教科書の内容を順番に教えるだけでは育むことはできないだろう。子どもたちが自らの学びをつなぎ、教科



の本質にせまっていく姿を授業者が丁寧に見とり、「教科で願う学び」を土台にした授業構想をしていくことは、子どもたちが教科の本質を自分のものにしていくきっかけになるはずである。

このような姿をより明らかにしていくために、私たちが大切にしてきた教科ならではの文化を味わう授業の中で「教科で願う学び」を子どもたちに育むことができているかということ、子どもたちの姿から分析していく必要があるだろう。子どもたちが教科の本質を自分のものにながら、育みたい人間像にせまり、「学びの自覚」につながる授業を構想していきたい。

5 本年度の研究

前述した学びを育てていくためには、授業での子どもの姿を根拠として、「教科で願う学び」とはどのような学びなのかを明確にしていく必要があるだろう。そこで今年度は昨年度までに見いだされた「教科で願う学び」を足がかりにして授業づくりを行うことで、題材における子どもたちのあらわれを見とり、「教科で願う学び」を分析していきたいと考えている。

そのため、授業構想をする際に授業者は、その題材における「教科で願う学び」を明確にしておく。そして、題材における子どもたちのあらわれを見と

り、実際にどのような学びの姿を育むことができたのかを分析することで、「教科で願う学び」をより具体的にしていくことができるはずである。

【資料1】にあるように、「教科ならではの文化」と「教科で願う学び」の関連性を見ると、教科によってもそのとらえ方は様々である。子どもたちは教科ならではの文化を味わう授業の中で、教科らしい考え方やものの見方を育んでいるはずである。教科性は大事にしながら、教科ならではの文化を味わうことを通して育まれている「教科で願う学び」をより具体的なものにしていきたい。

その姿を分析していく中で、私たちが想定している以上の学びが子どもたちに育まれていることが見いだされることもあるだろう。題材を重ねて学んでいく子どもたちのあらわれを丁寧に見とり、その学びの背景や要因を分析していくことで「学びの自覚」の姿も明確にしていくことができるはずである。そして、私たちが見とった「教科で願う学び」を育む子どもたちの姿を基に、年間を通して「教科の主張」を更新していく。

また、全体研究授業や研究協議会を実施し、様々な先生方との意見交換や授業検討、他研究からのご示唆をいただく機会をつくっていききたいと考えている。年度末には、本研究における成果や課題を整理し、研究紀要としてまとめていくことで次年度につなげていきたい。

【資料1】 令和三年度 教科ならではの文化と「教科で願う学び」

	教科ならではの文化	「教科で願う学び」
国語	感受性や創造力を働かせて言葉の世界に浸る営み	題材に描かれた価値や人々の生き方、考え方に対して自分なりの考えをもつことや、それを他者と交流することで言語感覚を磨きながら、自らの考えをさらに深めていくこと
社会	様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善の社会のあり方』を創りあげていく営み	課題解決のための選択・判断に資する知識・概念や理論などに気づき、自分なりの考えをもち、よりよい社会の構築に向けて考察していくこと
数学	様々な事象を数理的に捉えて、解決する過程において的確な解釈や判断をしたり、法則や定理を結びつけたりする営み	数や図形、統計の概念を再構築していくこと
理科	実証性・再現性・客観性にこだわりながら、自然の事物・現象に向き合う営み	自然の事物・現象から探究心を高めたり、自然の事物・現象のとらえ方を発展・深化させたりすること
音楽	音を媒体としたコミュニケーションが生まれる営み	音楽に対する感性を働かせながら、音や音楽と向き合うこと
美術	物事を造形的な視点で捉え、感性を豊かに働かせて創造する営み	試行錯誤や対話を繰り返し、造形的な気づきを重ねながら、新たな意味や価値を見いだすこと

保健 体育	思考し、体現しようとする営み	運動や生活に対する新たな視点を得ること
技術	技術を多様な視点から見つめ、最適解を求める営み	技術を多様な視点から評価し、試行錯誤すること
家庭科	当たり前を見直す営み	現在の生活と照らし合わせながらよりよい生活を求めて意思決定すること
英語	自分の思いや考えを伝え合うような英語でのやりとりを通して、『伝わった』『わかった』という達成感や充実感を味わい、さらに、積極的にコミュニケーションを図ろうとすること	言語が使用される様々な場面において『よりよいコミュニケーションとは何か』を考え、実践しながら追求すること

6 おわりに

昨年度末の国語の授業で3年生の子どもたちに行ったアンケートに、以下のような言葉が記されていた。

「国語はさまざまな事実や意見を読み解き、感じる教科なのだと思います。つまり、感受性を育むものだと思うのです。そして『読み解く力』をもとに、自分の感受性も活かしていくことで、現代社会を生きていくための多様性（感受性）と画一性（事実などから考え、読み解く力）を育てていくことができます。国語という教科は今後の生き方を決めていく上でも大切なものだと思います。もちろん他人を認める姿勢も大切。自分を主張することも大切。でも社会のことも考える必要がある。そして何よりも、今後生きていく上で『考える力』と『感じる力』というのがとても大切なものだということが、僕が一番伝えたい最後の考えです。」

3年間の学びをふり返った子どもたちの記述から、教科の学びを通して、ものごとのとらえ方や価値観、生き方そのものなどを見つめ直している姿を

見とることができる。このような子どもたちの学びの姿を日々の授業で見とっていく視点をもつことは、これからの研究を進めていく上でも大切なことだと考えている。

授業での子どもたちのあらわれを見とる中で、授業者自身が自分の教科観を問い直されることもある。その積み重ねによって、授業者も子どもたちも教科で学ぶことの意味を見いだすことができるのではないだろうか。

本校では、専門の教科に限らず、互いの授業づくりについて語り合う群別研修のグループが構成されている。群別研修をすることで、他教科の先生方と語り合い「教科らしさとは何か」を問い直しながら、様々な視点で子どもたちの学びを見とる目を育むことができていると感じている。このような学び合う教師集団を大切にしながら、今年度も子どもたちの学びを育んでいきたいと考えている。

最後に、本研究の講師としてご指導ご助言をいただいている上智大学総合人間科学部教授の奈須正裕先生、静岡大学大学院教育学研究科教授の村山功先生に厚くお礼を申し上げます。

参考文献：静岡大学教育学部附属静岡中学校・村山功（2019）

『対話が深める子どもの学び—「教科ならではの文化」を味わう授業—』明治図書
村山功(2018)「附属静岡中学校の研究史と次期学習指導要領 共同研究者から見た姿」
『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会・自然科学篇）第68号』